

特集「ますます広がる音楽情報処理」の編集にあたって

北原 鉄朗^{1,a)}

私がまだ駆け出しの研究者だった頃、年配の研究者の方々によくいわれたことがある。

「昔は音楽の研究をすること自体に説明が必要だった。」

確かに、客観性、定量性、再現性、普遍性が重要な工学研究において、人間による主観的で芸術的な活動である「音楽」は、研究対象として奇異に映ったのかもしれない。しかし、音楽がテクノロジーと一心同体で発展してきたのはいうまでもない。シンセサイザーやコンピュータを使わない音楽制作はもはや想像ができないし、携帯型大容量音楽プレイヤーや音楽のネット配信の普及に合わせて音楽の楽しみ方も変わってきた。インターネット上の動画共有サイトでは、プロではない音楽家が自身の楽曲や歌唱を投稿する文化も定着した。こういった事柄を背景に、音楽は、いまや情報処理研究の重要な研究対象の1つとして認識されている。

こういった状況を背景に、情報処理学会論文誌では2002年以降、数年に1回のペースで音楽情報処理特集号を企画してきた。前回の「音楽情報処理技術の進歩とその拡がり」特集号(2016年5月刊行)では、日英含めて7編の論文が掲載された。今回の特集号は、それから3年以上が経ち「そろそろ…」という声に応える形で企画したものである。7回目にあたる今回の特集号でも、特に特定のテーマに限定することなく音楽情報処理に関するあらゆる分野の論文を募集した。20編の論文(テクニカルノートを含む)が投稿され、そのうち4編が英語であった。音楽情報科学研究会の常連ではない方からの投稿もあり、研究コミュニティを拡げるのにある程度効果があったと考えている。

編集委員会では、各投稿論文に2名の査読者を割り当て、厳正な査読をお願いした。査読コメントを注意深く確認し、採録への条件が不明瞭だったり真意を読み取りにくいコメントを丹念に修正することで、著者が査読コメントの趣旨を理解せずに誤った論文修正をすることがないように、最大限の注意を払った。その結果、9編の論文(テクニカルノートを含む)が採録され、採録率は45%となった。英語論文のうち採録されたのは2編であった。内容は、自動作曲・編曲、音楽情報検索から音声知覚や知能ロボットま

で幅広く、研究テーマの広さが特徴の音楽情報処理分野にふさわしい特集号になったと考えている。一方、アイデア自体は面白いものの、論文の書き方に問題があったり、評価などが不十分なために不採録になったものもあった。これらについては、ぜひ再投稿を期待したい。

今回の特集号では、前回と同様にマルチメディアコンテンツ(動画データ)を論文に添付して投稿できるという試みを行った。結果的に、2編の論文にマルチメディアコンテンツが添付され、そのうち1編が採録された。マルチメディアコンテンツを添付してくださった論文が予想よりも少なかったため、その理由を検証し、今後活かせればと考えている。

最後に、論文を投稿してくださった著者の皆様、査読をご担当くださった査読者の皆様、メタ査読および編集に携わってくださった特集号編集委員の皆様および事務局の皆様に、心より感謝を申し上げる。

「ますます広がる音楽情報処理」特集号編集委員会

- 編集委員長
北原鉄朗(日本大学)
- 幹事
平井重行(京都産業大学)
平賀瑠美(筑波技術大学)
吉井和佳(京都大学)
- 編集委員
伊藤彰則(東北大学)
伊藤貴之(お茶の水女子大学)
亀岡弘和(NTT)
酒向慎司(名古屋工業大学)
竹川佳成(公立はこだて未来大学)
中野倫靖(産業技術総合研究所)
浜中雅俊(理化学研究所)
平田圭二(公立はこだて未来大学)
真鍋宏幸(芝浦工業大学)

¹ 日本大学
Nihon University

^{a)} kitahara@chs.nihon-u.ac.jp